

花の香り (秋-3)

中村祥二 (会長)

1. すがすがしいキクの香り

キクは私たちに日常的に最も親しまれている花で、身近に有りすぎてキク (*Chrysanthemum*) があることを意識しないことがある。キクの切花全体の生産額は切花・鉢物の生産額の1/3以上を占め、ユリ、バラ、カーネーションを大きく引き離して花卉の第1位を占めている。日本ではサクラ、バラに次いで好まれる花である。

中国で菊が尊ばれたのは菊のもつ芳香、美しい花色と薬効が有ると信じられていたためであり、蘭、梅、竹とならんで「四君子」として貴ばれてきた。

作家の陳舜臣さんは中国では香りこそ花の心で



菊花壇 (新宿御苑)

写真：鳥居恒夫氏

あるといい、こう述べている。「植物にかぎって言えば、やはり蘭と菊が双壁であろう。……蘭や菊の香りは、一過性のものではない。たとえば髪にかざしたり、衣服のなかに入れておいたりすると、そのにおいはうつるものなのだ。それを薫染という」

日本でも菊は霊薬といわれ、寿命を延ばす効果があると信じられ、陰暦9月9日の重陽節では菊

酒を飲むことも行われた。宇多天皇 (平安前期) のときに始まったとされる菊綿 (きくわた) と称する風流な慣習がある。8日の夜に綿を菊花にかぶせ、その露にぬれた菊の香のする綿で9日の朝、肌をぬぐうと、老をすてるといわれ、これを贈物としたことが《紫式部日記》などにくわしい。

それではキクの香りとはどのようなものだろう。

秋、庭に咲く何種ものキクを嗅いでみるとその香りは多様である。資生堂研究所が小田急の向ヶ丘遊園で40種類のキクを対象に調査したところ、7種類の香りに分類できた。

①典型的なキクの香りでさわやかさの中にフェノール様の薬くささがある香り (品種名: 港南錦、かがやき)

以下のタイプは①の典型的なキクの香りに下記の特徴的な香りが混じっているもの。

②沈香、龍脳様でやや防虫剂的なニュアンスのある香り (あしずり) このタイプのキクを嗅いでいると、さわやかで沈香の特徴のあるすがすがしい香りは飽きることがない。いにしえの人が信じていたキクの薬効にうなずける気がする。

③雄蕊の先端にあるヤクの成熟した花粉が発酵したような香り (嵯峨菊、肥後菊)

④アンバー様の甘さにほこり臭さを感じられる香り (ノジギク、ショウノウギク)

⑤葉を揉んだときに感じる青臭さの強い香り (あざみ)

⑥アップル様のフルーティさが強い香り (アリサンアブラギク)

⑦ハーブのタイム様の香り (魚子菊)

その他にハッカギク (カオルギク) というミント様のすがすがしい香りを放っている種類があった。

11月に日比谷公園で行われた東京観光菊花協会の展示では大きい花の種類は香りが弱く、小さい花の種類は強い傾向が感じられた。

2. キンモクセイの香りの復権

秋、ヨーロッパやアメリカのパフューマーが、新横浜の研究所に来たとき、運良くキンモクセイ (*Osmanthus fragrans*) が咲いていれば、必ず案内することにしていた。どのパフューマーも、橙黄色の小さい花が放つ、少し青臭くラクトン様の強い華やかな甘さと、遠くからも感じる香りの広がりに一様に驚く。以前は欧米のパフューマーでこの花を知っている人は少なかったが、最近ではさすがに知名度も上がってきたらしく新しい香水の香りの表現に登場するようになった。

キンモクセイは中国原産である。日本では挿し木で雄株を増やして植栽に使うので、結実した雌株をみることはほとんどない。元琵琶湖研究所長の吉良竜夫先生から中国の上海に近い蘇州の太湖の公園で雌株がたくさん滴形の実をつけていたと伺ったことがある。日本には雄株だけが普通に植栽されてきたが、近年、中国から種子が入るようになり、実生が育っているようだ。

横浜付近では、9月20日頃から下旬にかけて開花する。昨秋は開花が遅れたが、そのお陰か例年よりもたくさん花をつけた。初春のジンチョウゲと同じように、独特の特徴のある香りで「いま咲き始めた」とすぐに分かる。中国ではジンチョウゲを七里香、キンモクセイを九里香とも言うそうだ。動物性香料で、最も高貴なものとする麝香という漢字は、鹿の放つ香りが矢を射るように遠くまで速く飛ぶ、ということをもそのまま字にしたものである。中国では古くからこの香りの強い拡散性が知られていて、それを的確に表現したのであろう。この二つの花の別称も香りの性質をよくとらえていて「白髪三千丈」の国らしい表現も楽しい。

日本では、残念ながらこの世界に誇れる東洋の花の香りが悪臭をマスキングする効果を持つことから、トイレ用の芳香剤に広く用いられてきた。この花の咲く頃に聞いた、散歩中の親子の会話が残っている。「お父さん、トイレの臭いがするよ」

キンモクセイの花が咲いたとき、近所の奥さんが話しているのを耳にした。「キンモクセイはなんと良い香りなのでしょう。私はこの香りを嗅ぐといつも幸せな気持ちになりますの。」花の香りが人

の心にこんな形で関わってくるとは、なんと素晴らしいことだろう。キンモクセイの香りをもっと大切にしたい、と私は思う。

その復権が進んでいるのを「香り風景百選」に見てみたい。

環境庁が行った「香り風景百選」の中にキンモクセイが2カ所選ばれている。ひとつは四国のほぼ中央部に位置する四条市。この郊外の山裾に王至森寺がある。この三門の西側のキンモクセイは根回り約3m、地上近くで三方に分かれ、高さが16mにも及ぶ。昭和2年、国の天然記念物に指定された巨木である。

もう一つは神奈川県藤沢市、鶴沼のキンモクセイの住宅街である。藤沢駅から江の島にかけての緑が多い鶴沼の住宅街は、多くの家でキンモクセイが植えられている。この町では子供が小学校に上がる時記念としてキンモクセイを植えることにしていると聞く。キンモクセイは大気汚染によって花が咲かなくなる。この花がよく咲くということはその町の空気がきれいであるということも意味するのである。

○香気成分：シス-3-ヘキセノール、リナロールオキサイド、 α -イオノン、 β -イオノン、 γ -デカラクトン、ディハイドロ- β -イオノン。微量ではあるがキンモクセイの香りの特徴づける重要成分としてローズオキサイド、ダマスコン類、ジャスミンラクトンを含む報告がある。



キンモクセイの実

鈴木一彌氏のブログから

3. クリーム・イエローのジンジャー・リリー

ハワイのオアフ島のレイを売る店に立ち寄ったとき、当然あると思っていたジンジャー・リリーのレイが見あたらない。店で聞いた栽培畑をたずねて、やっとの思いで探し当てたところは山陰の農場の一角にあった。たくさんの花が一面に咲いているという期待に反して、数花しか咲いていなかった。それでも、エキゾチックな強い芳香を放つ羽を広げた蝶のように見える白い花には強い印象を受け、記憶にはっきりと残っている。

ショウガ科に属し学名は *Hedychium coronarium*、原産地はインド、マレーシアで約 50 種類がある。芳香のある白、黄、橙、赤などの花で、高さ 1 m 前後から 2 m を超える大型種まである。切り花や花壇用に栽培される。半耐寒性の多年草である。*Hedychium*（ヘディキウム）は「甘い」と「雪」を意味する名前で最初に記録された純白芳香種に因んでいる。

英名で *garland flower*、*garland lily* と呼ばれるように伝統的に花輪、花冠、花飾りに使われ、人々は花色と芳香を楽しんできた。キューバでは国花であるこの花をマリポーサ（蝶）とスペイン語で呼んでいる。インド原産からキューバに持ち込まれ、その美しさと香りでキューバ人が最も愛する花である。恋人への贈り物、部屋の中の生け花、お墓への献花など幅広く人気がある。

ジンジャー・リリーを手元で是非咲かせたいものと思っていた。その様な折、香り研究家の嶋本静子さんから根茎を頂いた。頂いたものは花が咲いてから報告したいので、特に大切に育てることにした。

乾燥させないように夏季の水遣りを充分に、有機肥料を多めに、背丈がどの位大きくなるかわからないので 9 号鉢になどと気を配った。茎はぐんぐん伸び私の背丈程になり、何処まで大きくなるのか、ジャックと豆の木を想像するほどで楽しみと期待が入り交じった。8 月中旬から次第に花芽が見えるようになってきた。白とばかり思いこんでいた花の色は薄いクリーム・イエローで、白ではないジンジャー・リリーの香りを嗅げるようになった。事典で調べてみると、どうも原種

ではなくて *H. coronarium* に近い園芸品種の‘福寿’らしいことが分かった。

8 月 26 日の開花から 9 月 3 日までの 9 日間で 35 花をつけた。花の最大径は 7.8 cm なのでかなり大きい。香りはフローラル・スパイシーのタイプで、クチナシに丁子のオイゲノール、メチルオイゲノール、それにジンジャーのニュアンスがある。白花に比べるとジンジャー様の特徴が強い。窓をあけておくと、風に乗って入ってくる甘くさわやかでエキゾチックな香りがなんとも心地よい。自分で花を咲かせ、香りを聞くと細かいニュアンスまで知ることができ楽しいものだ。



ジンジャーリリー ‘福寿’

参考文献：

- 「園芸大辞典」、小学館、1994
- 高砂香料時報、No.141、2002
- 「香りの総合辞典」、日本香料協会編、朝倉書店、1998